

日風集

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第66号 2008年12月1日



湯たんぼ 左から香南市鍵山糸氏寄贈、大豊町上村登氏寄贈、南国市松木氏寄贈

資料見聞 湯たんぼ

電氣を使わないので環境に良いと最近見直されているのが湯たんぼです。

冬の寒い時、熱湯を入れて蒲団の足下へ入れて使いました。お湯がこぼれないように蓋をし、火傷しないように厚い布を巻いたりしました。最初はヌクヌクですが、蒲団の中が暖まっていくと、逆に冷めていくので、必要以上に熱くならず体にやさしいのが特徴です。朝方は中のお湯を洗顔にも使えます。

ただ、お湯を沸かして入れるのが一手間、電氣アンカが普及すると姿を消しましたが、かつては行火と並んでお年寄りや冷え症の方には欠かせない道具でした。

写真の湯たんぼは陶器製で、左は旧香我美町、中は大豊町、右は南国市で使用されていたものです。左のタイプはこれ以外に三個収集されており、比較的ポピュラーなタイプだったのかも知れません。陶製の湯たんぼや火鉢の生産は滋賀県の信楽が有名でしたが、これらの資料がどこの産なのかは不明です。

(梅野)



行火 土佐市 馬場俊清氏寄贈

企画展

「昔のくらし博物館―失われゆく衣食住の民具―」によせて

平成20年12月19日（金）～平成21年3月1日（日）

学芸専門員 梅野光興・中村淳子

昭和三〇～四〇年代は日本人の生活が激変した時代だと言われています。

明治時代に近代化が始まりましたが、旧来の暮らしぶりは一度に変わることはなく、そこそこ古い生活習慣が残っていました。それが戦後の高度経済成長によって激変し、それまでのライフスタイルは一掃されていきました。

確かにこの五〇年間で生活は便利になりました。洗濯機、掃除機など日々の仕事を代行してくれる機械の登場で、家事労働の時間が軽減され、女性の社会進出が可能になるなど大きな変化が起きています。

ですが、その一方で豊かな生活を支えるためのエネルギー資源の問題が生じたり、あまりに便利になったために人と人とのふれあいから生まれる温もりが失われているようにも思えます。

私たちは、過去を振り返ることによって今の生活を見直すことが必要ではないでしょうか。

今回の企画展では、当館が、開館準備の期間も含めて約三〇年間にわたって集めた民俗資料の中から、衣食住の民具を展示します。



味元家住宅。厚く葺かれたカヤ屋根が夏の日射しを遮断する

知っている人にはなつかしく、知らない人には面白い資料が並びます。それでは、その中からいくつかご紹介しましょう。

◆家は木や草や竹や土できていた

歴民には、津野町（旧東津野村）高野から平成二年に移築した山村の民家・味元家（登録有形文化財）があります。はじめて見た人が驚くのは大きな草葺きの屋根でしょう。「雨漏りしませんか」との質問もよくありますが、

厚く巧みに葺かれた草屋根は水が漏ることはありません。

骨組みの柱や梁は木、壁は土や竹、障子は木と紙です。アルミサッシのような気密性は無く、冬は冷たい外気がしのびこみませんが、夏は厚い草屋根が熱気を遮断し、開放的な造りから涼しげです。草葺きの屋根は、何十年に一度葺き替えるなど大がかりなメンテナンスが必要ですが、それを行なうことで長持ちします。

今の家は瓦屋根などに変わり、鉄筋コンクリートで作られるなど、草屋根に比べれば火事には強いのですが、中には、新建材に用いられている物質やカビを防ぐための薬や防腐剤が住む人にアレルギーを引き起こす場合があるようです。すべて身の回りの自然の素材で造られていた昔の家ではありえないことだったでしょう。

◆薪や炭がエネルギー源だ

昔の家の中心にはヘソのようにイロリが作られています。イロリは火を焚く場所です、食事を作ったり、冬は暖をとる、明かりの道具が少なかった頃は最



火鉢（佐川町）
手あぶりとも呼ばれる小型のもので、お客の時などに使用。

大の照明になるなど、まさに家のくらしの中心でした。イロリには薪がくべられ、煙が出ると家の中に漂いましたが、その煙に燻されて害虫がつかず家は長持ちしたのです。薪は近くの山から農閑期などにまとめて切つて来るのが習いでした。

別の部屋や屋外で明かりを用いるためには、江戸時代にはロウソクを使った行灯や提灯が使われ、明治以後はランプが普及しましたが、やがて電気が通じるとともに、明かりの民具は消えていきました。

炭は、煙が出ず、熱が持続し、しかもコンパクトであるという優れたものでした。簡単に移動できる火鉢や、寝る時に布団の中に入れる行火も、炭があつて初めて可能になったものでした。しかし、これら暖房用具も石油や電気、ガスなどの新しいエネルギーを使ったストーブやこたつ、エアコンなどに姿を変えていきました。



行灯
中にロウソクなどを入れ、
周りに紙を貼った



水くみ桶 (旧物部村)
川や井戸から水を汲んだ



火のし (南国市)
炭火を入れて服のシワを伸ばす



炭火アイロン (大豊町)
形は今のアイロンだが電気
ではなく炭火を入れる



膳箱 (旧物部村)
家族一人一人が持っており、中に
食器や箸を入れ食事の度に使った



皿鉢 (佐川町)
お客 (宴会) の時刺身や料理を
盛った



洗濯板 (高知市) 洗濯機以前は
タライに洗濯板で衣類を洗った

◆水を汲むのは重労働だった
今でこそ蛇口をひねれば水が出ます
が、近代的な水道が普及するまでは、

井戸や川から桶おけに汲んでくる以外に水
を手に入れる方法がありませんでした。
汲んできた水はハンドというカメに溜
め、柄杓へしやくで汲んで使いました。水は、
飲み水をはじめ、炊事、洗濯、入浴な
どいろいろなことに使いました。運ぶ
のは重労働だったので、貴重な水を大
事に大事に使いました。
もちろん電気洗濯機などはなく、タ
ライに水を入れて洗濯板を使って洗う
のが一般的な光景でした。お風呂も毎
日入ることはなく、夏はタライに水を
はって行水なぐすいをしました。

◆大きく変わった食事の場

現在の食卓は、洋風のテーブルで椅
子に腰掛けるか、畳の間で座卓を囲ん
で食べるのが一般的ですが、かつては
机のようなものは使いませんでした。
各自専用の箱膳(膳箱)を台にしてイ
ロリの周りで食事をしました。チャブ
台という円形の座卓が使われるようにな
ったのは明治時代以後のことでした。
台所も、大きく変わりました。移築
してきた味元家には台所が無く、一体
どこで炊事していたのかと聞かれます
が、実は家の中には台所はありません
でした。時代によっては土間に簡単な
水場(炊事場)を設けたりしていまし
たが、さしかけ屋根で母屋の外に設け
たりしていたのです。もともと土佐で

は炊事場は屋外に小屋がけするのが一
般的だったようです。それが便所や風
呂場とともに家の中に取り込まれて
いったのです。そして最新式の家では
ダイニングキッチンが、家の中心の位
置を占めるまでになっています。

◆おわりに

劇的な変化の中で、それまで使われ
てきた生活道具は不要品になっていき
ました。そしてゴミとして大量に捨て
られていったのです。

しかしながら、それらの道具の中に
は古代や中世から使われてきた形式の
物も残っています。また、私たちの親
や祖父母、祖先たちから代々引き継が
れてきた物も少なくありません。民具
には何百年、時には千年以上にわたる
庶民の歴史や生き方が凝縮されている
と言ってもよいでしょう。

当館をはじめ県内各地の資料館では、
土佐人の生き様を伝えるために、それ
らの道具・民具を集め、大切に保管し
ています。民具を見ながら、昔の人の
知恵と工夫を学び、今の生活を振り
返ってみてはいかがでしょうか。

なお、今回の企画展は、高知市春野
郷土資料館で二月一九日(金)から
二月一日(日)まで開催される「昔の
しごと資料館」と連携して開催します。

おこうじょうせき 岡豊城跡国史跡指定となる

館長 宅間一之

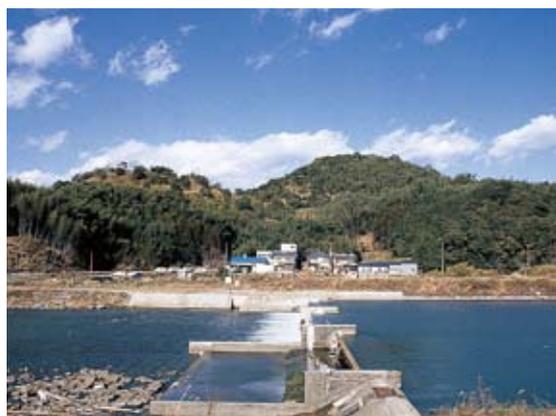
本年七月二八日、岡豊城跡が「わが国の歴史の正しい理解に欠くことがで
きず、且つ、その遺構の規模、遺構、
出土遺物等において学術上価値のある
城跡にあたる」として国史跡に指定さ
れた。本県にとっては国指定史跡とし
ては一〇件目、三〇年ぶりの指定であ
り県民の関心も高かった。

岡豊城跡の所在する岡豊山は、昭和
一一年に所有者によって「長宗我部岡
豊城跡西田公園」として公園化された。
昭和四五年には所有者が変わって一層
整備され、レストランも建設された。
この間、昭和三〇年二月には、「詰ノ
段」を中心に県指定の史跡に、昭和
四五年一二月には「伝・厩跡曲輪」が
南国市指定史跡となった。

昭和五八年八月には、高知県立歴史
民俗資料館の建設地に選定され、昭和
六〇年から城跡の整備と、保存活用
のための基礎資料を得るための発掘調査
が行われた。調査によって詰には重層
構造の建物が、また詰下段や三ノ段に
も礎石建物の存在が確認された。さら
に四ノ段には安土城でも確認されてい
る最新技術を駆使した虎口遺構などが

次々に確認され、防壁堅固な構造をも
つ岡豊城跡の性格が解明されていった。
また詰の建物は瓦葺きで、それも天正
三（一五七五）年の紀年銘をもつ瓦の
出土から、全国の城郭のなかでもいち
早く瓦葺建物が構築されていたことも
明らかとなった。さらに平成一三年の
南斜面の調査では、外堀機能を果たし
ている国分川側から登城する虎口が検
出された。

周辺の縄張り調査からは、長宗我部
氏が岡豊城を土佐統一の中心的役割を
果たす城郭として丘陵全体の整備をす



国分川からの岡豊城跡



空から見た岡豊城跡と城下の岡豊新町跡

すめ、総城郭化した形跡も知ることも
でき、城跡の規模の広がりも確認でき
た。これらの学術的評価が国指定につ
ながった。

いよいよ史跡としての整備、活用の
充実を効率的に進めなければならぬ。
そのためには、早期に実施計画を策定
し、これに基づく計画的な事業推進が
必要である。過去の発掘調査で数々の
遺構が発見されている。これらの遺構
をいかに良好な形で保存するか。また
建造物跡は一部分整備されているが、
学術的見地にとって可能なかぎり復元
的な手法も用いて、訪ねる人々の理解
しやすい整備も視野に入れなければな
らない。そして中世城跡のシンボルの
遺構である堀切や堅堀、土塁の整備、
それに南北両斜面や、伝・厩跡曲輪の
西丘陵などは未調査である。それらの
部分についての縄張り図の作成による
城跡全貌の把握が必要である。

高知県立歴史民俗資料館の效果的活
用も重要である。近年、織豊城郭の研
究も進展し、岡豊城跡への評価もまた
長宗我部氏への関心も高まりつつある。
岡豊城跡や長宗我部氏に関する史・資
料の積極的な発掘と収集・研究、そし
て館内の展示内容も含め、長宗我部氏
研究の、また情報発信の拠点として活
用できる館の位置づけ、性格付けが必
要であり課題でもある。

テーマ 展示

維新の志士たちの遺品

—高知県文教協会所蔵資料から—

平成21年1月2日（金）～3月1日（日）

様々な文化的事業への貢献で高い評価を受けている高知県文教協会より、貴重な幕末維新期の資料が寄託されました。

この二百点にも及ぶ資料の多くは、もともと同協会の前身ともいえる高知県教育会が設立した「土佐記念館」に収蔵されていたものです。

記録によれば、昭和一九年三月に第一回目の陳列会を行っていますので、その際、県内外在住の志士の子孫から資料の寄託・寄贈を受けたものと思われる。



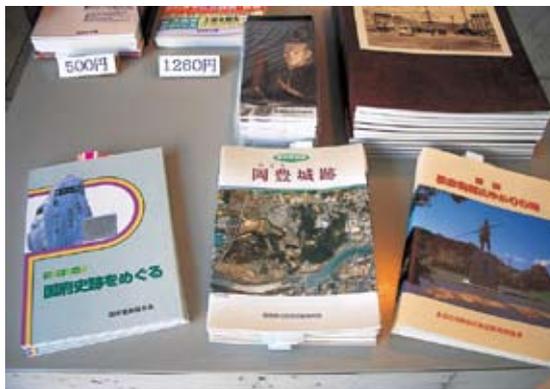
土佐記念館陳列室の外観写真（推定）



袴（間崎滄浪切腹時着用）

今回展示では、前述した望月・間崎関係の文献資料の他、間崎滄浪切腹時の袴、同切腹時の短刀拵、望月龜弥太所用の鐙なども併せて展示する予定です。
（野本・片岡）

『国府史跡をめぐる』は国府史跡保存会の手になるもので、著者の故郷常美さんの懇切丁寧な解説、国府史跡に寄せる熱い思いが行間にあふれ、そこに執務した紀貫之に思いをはせて雅の里に人々を誘う。



左から『ガイドブック 国府史跡をめぐる』、『国指定史跡 岡豊城跡』、『探訪 長宗我部氏ゆかりの地』

『探訪 長宗我部氏ゆかりの地』は土佐のまほろば地区振興協議会の編集である。長宗我部氏戦勝のエリアから、栄光の舞台、そして衰えを誘う末路の地へと、栄枯盛衰の戦国の世を思わせつつ三二カ所の史跡に人々を誘う。

近年、若者たちの間での長宗我部氏への関心の高まりが注目されている。テレビゲームでの人気急上昇とも言える。しかし動機もなく仕掛人もいなければことの盛り上がりはない。当館制作のストラップ・青年武将「長宗我部もちか君」も、国指定記念の切手シートも好調な売れ行きである。

「土佐のまほろば三部作」。これを開いてその地で歴史の語りを聞く。そこは新しい目を開かせてくれ、歴史を一層身近なものにしてくれる。訪ね確かめる愉しさが沸きあがってくる。ここに史跡探訪の醍醐味がある。

当館のミュージアムショップに三冊のガイドブックが並んでいる。『国府史跡をめぐる』と『岡豊城跡』それに『探訪 長宗我部氏ゆかりの地』である。

『探訪 長宗我部氏ゆかりの地』は

『探訪 長宗我部氏ゆかりの地』は土佐のまほろば地区振興協議会の編集である。長宗我部氏戦勝のエリアから、栄光の舞台、そして衰えを誘う末路の地へと、栄枯盛衰の戦国の世を思わせつつ三二カ所の史跡に人々を誘う。

歴史館のパティオ（マ）

土佐のまほろば三部作

館長宅間一之

考古

岡豊山の遺跡

①岡豊山古墳の発見

南国市岡豊町八幡通称岡豊山にある岡豊城跡は、昭和三〇年（一九五五）二月一日に高知県の史跡に指定され、本年七月二十八日には、国の指定史跡となりました。岡豊城跡は長宗我部氏の居城跡ですが、城が造られる以前の人々の足跡はなかったのでしょうか。岡豊山の遺跡について、土佐の考古学史を繙いてみましょう。

昭和九年（一九三四）一〇月二五日の『高知新聞・土陽新聞』には、以下のように記されています。「長岡郡岡豊村西田良氏は、自己所有にかゝる岡豊山長宗我部氏城跡十七町の全山に、今回公園として四季の草木を植付け、これを開放したので、日々登山遊歩者で賑うてゐるが、更に同氏は私財數千圓を投じ、植林および幅三尺六寸、高さ二丈六尺の縣下第一の城趾記念碑を建てる事となり、其基礎工事に數名の人夫を使つて工事中、去る廿日午後三時頃、三ノ丸地下八尺の箇處から二尺廻り高さ五寸、口付素焼の土器を發掘したが、該土器は史談會武市健山氏の鑑定では、祝部土器であるが由で、なほ同所空井戸からは長宗我部氏居城當時の平瓦及び丸瓦數枚を發見したが、この城趾から古代土器の發見された事は初めてで、城趾が考古學上に資する處多大なるものがあらうと期待されてゐる。」（『新聞雜見 岡豊城趾から古代土器を發見長宗我部氏居城の瓦も發見』『土佐史談』第四九号 昭和九年一月一日刊より）と報じられています。ここに記されている記念碑は、現在四ノ段の南に建っている碑のことです。この付近に古墳が存在していたようですが、現在は古墳は確認できません。（つづく）（岡本）

歴史

明治時代の通送車発見さる

今秋の「絵葉書展」では、県内の近代郵便事業に関する調査も重要なテーマの一つでした。図録製作が佳境に入っていた頃、津野町を調査中だった中村学芸員から意外な情報が寄せられました。同町在住の個人の方が郵便配送に使われた古いヤカーを所蔵しているということです。

俄勉強中の私は、一瞬明治期の錦絵等に出てくる「通送車」を連想したのですが、「まさかこの高知にそんなものが残っているはずがない！」と一笑に付したことでした。しかし、中村が撮ってきた写真と東京の郵政資料館から提供を受けたデータを見比べてみて仰天。寸分違わぬ小型の通送車であることが確認できたのです。この通送車（地元では郵便物配送車と呼んだ）は、須崎・葉山・津野山方面にかけての郵便集配に利用されたもので、所蔵者の下元健起さんによると大崎要吉さんという郵便通送員が引つ張っていたものだそうです。郵政資料館も太鼓判を押したこの資料。貴重な生き証人として末永く保存されることを祈ります。（野本）



通送車 明治中～後期



「通送員と通送車」(『郵便現業絵巻』) 郵政資料館蔵

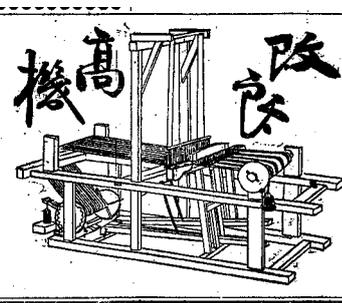
民俗

『土陽新聞』の民具の広告

この夏、はじめて明治時代の高知の新聞『土陽新聞』をまとまった形で読む機会に恵まれました。絵葉書展の準備の一環で、「高知で絵葉書ブームがあったのかどうか」や「高知で絵葉書が作られはじめたのはいつ頃か」を調査するためでした。

読みはじめると、これがたいへん興味深く、所蔵する高知市立自由民権記念館に日参することになりました。該当する記事を見つけると喜びも一入でしたし、民具に関する広告があると、ついつい見入ってしまった（絵葉書展の次は民具展なのです）。絵葉書の調査成果は絵葉書展や同展図録でご覧いただくとして、『土陽新聞』に掲載された民具の広告をご紹介します。

例えば、明治三四年（一九〇一）四月二五日には、改良高機たかばたの広告が載っています。「原高機」の発明者、高知市本町上一丁の写真師、原房太郎が、「踏木を踏んで運転し、一日二反を軽く織れる新発明の機である」と宣伝しています。



【土陽新聞】(明治34年4月25日) 高知市立自由民権記念館蔵

その他にも岡豊中島の改良稲扱や京都の白挽器など、いろいろな民具の広告が載っているの、また日参して調べてみたいと思っています。（中村）



大好評！元親くんストラップ 6日で売切れ！！

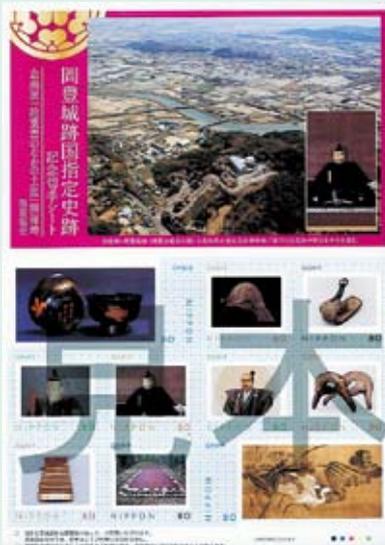
歴民初めてのキャラクターグッズ『もとちか君ストラップ』。初めてのことで売れ行きを案じていたのですが、新聞で紹介されると、あれよあれよという間に三日間で完売しました。たくさん買いたかった方や買えなかった方、本当にごめんなさい。好評だったので、第二弾も計画中です。乞うご期待！
(濱田)



銅鐸作りの実演をしました。

企画展「土佐発掘物語Ⅱ―謎！弥生時代の青銅器 発見と発掘」(平成二〇年七月一八日(金)～八月三十一日(日))に関連して、八月二十八日(木)～三〇日(土)の午前十一時～一二時まで低融合金による銅鐸作りを実演しました。九月四日には、参加者によるビデオ投稿が民放局で採用され放映されました。ビデオ撮影をされた方より銅鐸作りのビデオが寄贈され、学校の出張授業でも利用させていただけることになりました。
(岡本)

れきみんニュース



記念切手発売十出張郵便局が来た！

岡豊城跡国指定を記念して『長宗我部氏岡豊城跡記念切手シート』が発売されました。一枚一、五〇〇円。当館受付及び通信販売で発売中です。
また、今回の絵葉書展特別イベントとして、高知東郵便局の出張窓口が登場しました。
(濱田)



豊楽寺近くの集会所で昼食



立川番所で記念写真

「食のまち」が外へ飛び出しました！(大豊町編)

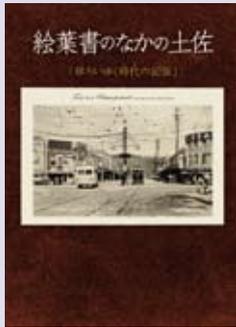
平成二〇年一〇月一九日、「食のこころ」では初めて館から外へ出張講座を行いました。目的は大豊町。
立川番所・豊楽寺薬師堂・碁石茶製造現場・定福寺などを宅間館長と坂本正夫前館長の案内で見学。銀プロウ寿司やカボチャのタタキに舌鼓を打ちました。気持ちのいい秋空の下、参加者四〇名は、大豊町の歴史、文化、食文化を学びました。
(濱田)

新刊案内

企画展

「絵葉書のなかの土佐 移ろいゆく時代の記憶」

平成20年度秋の企画展図録。絵葉書の歴史、絵葉書がとらえた時代の世相、高知を撮影した絵葉書などのテーマを約600点の図版で紹介。



単なる絵葉書図録の域を越え、目で見ると土佐近代史と言える内容になっています。

A4判 104頁
売価 1,000円
送料 290円

振込先

口座番号 01600-2-38806
加入者名 高知県立歴史民俗資料館

新年のイベントのご案内

平成21年1月2日(金)より開館します。新年は下記のイベントをご用意し、皆様のお越しをお待ちしております。

- ◆1月2日(金) 3日(土) 9:00～
くじ引き大会!?
歴民館からのお楽しみくじ引きプレゼント
何が当たるかはお楽しみ♪(先着各50名)
- ◆1月2日(金) 9:00～
新年! 歴民お茶会
先着50名 参加費無料
ワクワクワーク
- ◆1月2日(金) 10:00～12:00
「昔遊び」
1月3日(土) 14:00～15:00
「土佐民話の家②」 講師・市原麟一郎氏
定員各30名 電話かEメールでお申し込み下さい。観覧券要

年末年始の休館

平成20年12月27日(土)～平成21年1月1日(木)
新年は1月2日から開館します。

無料	観覧料	休館時間	開館時間	〒783-0044	編集・発行	平成20年12月1日	岡豊風日(おこうふうじつ) 第66号
料: 高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(一名)	450円・団体(20人以上)360円 (企画展)常設展示込500円・団体(20人以上)400円	臨時休館あり 通常期(常設展)大人(18才以上) 12月27日～1月1日	午前9時～午後5時 年末年始12月27日～1月1日	南高市岡豊町八幡1099-1	高知県立歴史民俗資料館	12月1日	
				TEL 0888662221			
				FAX 0888662211			

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成20年12月～21年3月の催し

企画展

「昔の暮らし博物館 -失われゆく衣食住の民具-」



平成20年12月19日(金)～3月1日(日)

電気やガス、水道が無かった時代、私たちのくらしはどのようなものだったのでしょうか。

いろいろのまわりでの団らん、電気を使わない明かりや暖房、水道の蛇口の無い台所…。

ちょっと昔なのに、今とは違う生活を、館蔵の衣食住の民具をとおして紹介します。

れきみん講座 要予約 観覧料要

- 1月10日(土) 14:00～15:30 先着100名
「土佐の民具①」 講師: 梅野光興(当館学芸員)
- 1月24日(土) 14:00～15:30 先着100名
「土佐の民具②」 講師: 中村淳子(当館学芸員)

展示室トーク 申込不要 観覧料要

- 1月17日(土) 13:00～14:00 講師: 担当学芸員

民俗展示室企画コーナー

- 「正月と節分」**
平成21年1月2日(金)～31日(土)
- 「おひなさま」**
平成21年2月1日(日)～3月31日(火)



テーマ展示 (3階総合展示室)

- 「維新の志士たちの遺品**
-高知県文教協会所蔵資料から-
- 平成21年1月2日(金)～3月1日(日)

れきみん講座 要予約 観覧料要

- 3月7日(土) 14:00～15:30 先着100名
「和菓子の世界②」 講師: 青木直己氏(虎屋文庫)

高知の食文化を味わう～食のこころ～

- 平成21年1月17日(土)～安芸市入河内～
- 2月21日(土)～西土佐～
- 3月21日(土)～北川村～
- 申込要 参加費2,500円程度
前月10日に申込受付開始
詳細はお問い合わせ下さい

次回企画展の予告

「兜 -もののふの美意識-」(仮)

平成21年4月24日(金)～平成21年6月21日(日)

日本甲冑武器研究保存会広島県支部の皆様のコレクションを中心に、選りすぐりの名品約100点を展示します。

中世から近世にかけて流行した様々な兜をジャンル別に展示。また、土佐藩士が身に付けた甲冑なども併せて展示します。